

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷一十二第

行發日一月七年四十大

論叢

國債利子及官吏俸給の免稅……………法學博士 神戸 正雄

自殺統計論……………法學博士 財部 靜治

米價と關稅との關係に就て……………法學博士 河田 嗣郎

說苑

商品堆積の理論……………經濟學士 谷口 吉彦

インフレーションの意義并に標準に就て……………經濟學士 小川福太郎

マクスルの絶對地代と價值法則……………經濟學士 八木芳之助

雜錄

パンタレオニ氏業績の回顧……………經濟學士 松岡 孝兒

ジエームス・新マルサス主義……………經濟學士 岡崎 文規

統計拾穗抄……………法學博士 財部 靜治

京都帝國大學經濟學會大會記事

法令

大正十四年國勢調查施行令・失業統計調查令・船檢船查規定中ノ改正

(禁轉載)

インフレーションの意義

並に其標準に就て

小川 福太郎

序言

インフレーション (Inflation) なる言葉は、我國に於て通常、「通貨膨脹」又は「通貨の過剰」と譯されてゐるが、通貨が膨脹してゐる又は過剰であるといふからには、或一定の正常とすべき通貨量が知られて居つて其以上に通貨が多くなつてゐることを指すものでなければならぬ様に思はれる。又、インフレーションなるものが、「貨幣の一の病氣」(a monetary disease) であるとするれば、其對策を講ずる上に於て、豫め正常とせられるインフレーションに非る場合が如何なる状態を指すかといふことも知られて居らねばならぬと思はれる。是れ恰も人間の體温が四十度に上つた時に、それが高きに過ぐるものであるといひ得るは、正常であるべき體温は大凡三十七度前後であることが豫め明かになつてゐるが爲めであり、且つ其れを標準として高き體温を其點迄下げる療法を講ずることが出来るのと同じ理由に基くものである。然らば、茲に問題とするインフレーションに就ては、其れと然らざるものとの區別は何を標準として分つか、又正常なる通貨の量を決

定する標準を何に求めるか、更に其根據は那邊に存するかといふが如き疑問を生ずる。私は以下に於て、多くの論者がインフレーションの定義或は意義として掲げてゐるものに就て、其意味並に其論據とするところをたづね、それに依て右の疑問を解き得るか否か、其他に尙方法があるか否かの考察を少しく進めようと思ふものである。

一 インフレーションに與へられたる定義と其論據

インフレーションの問題は特に歐州戦争の開始以來盛んに論ぜらるゝ様になつたのであるが、其導火線ともいふべきは、當時交戦諸國に於て戦争を續行するために、政府が(租税の徴收以外に於て)巨額の紙幣や公債を發行し或は銀行より多額の信用を獲得したことに依て通貨が非常に増加すると共に、一面には物價の著しき騰貴を生じたといふ事實に存するといふことが出来る。而して此物價の著しき騰貴の原因としては、通貨の非常なる増加といふ事實の外に、尙、戦争遂行のために若干の有體財の需要が盛んになり其生産の爲に、或は戦役其ものゝために勞働力が集注せられ、他の有體財の生産に向けらるゝ勞働力が少くなつて後者の有體財の供給が少くなつたといふ事實が有力なるものとして考へられてゐる。従つて論者が與へてゐるインフレーションの意義又は定義を見るに何れも、(一)通貨の供給の非常なる増加(二)有體財の生産の減少(三)物價の非常なる騰貴の三つの事實に注目して、表面より或は裏面より考察してゐることが看取し得られるのである。

今、インフレーションの定義又は意義として掲げられてゐるもの、中で、略々同様な意味を現はしてゐると思はれるものを集めて類別すると次の如くである。其(一)は「通貨の供給が商業上又は商取引上の必要以上に超過して、居つて、其超過のために物價の騰貴を來すこと」を指すものであつて、Kemmerer が「インフレーションなる言葉を使用する者の大部分に共通なる一觀念」として掲げ、且つ彼がインフレーションに關する統計的研究に於て用ひてゐる意義に相當する。又、Seligmann の「インフレーションも殆んど同意味である。(註二)さて此定義に於ては、若し通貨の供給が商業上の必要以上に超過するならば、其超過のために必ず物價の騰貴を來すものである、といふ意味が含まれてゐる様に思はれる。

(註一) Kemmerer は「インフレーションなる言葉を使用する者の大部分に共通なる一の觀念は『通貨 (circulating media) の供給が、商取引の必要を超過せること、即ち、貨幣及び流通信用の何れか一方又は双方が過多であつて、其過多なることが物價の騰貴を招來せしめること』である」となし、Seligmann は「インフレーションとは、正常なる物價水準に於て、商取引を管むために現實に必要とせられるよりも多量に、通貨が存在することである」といふ。

次に、其(二)は「通貨の供給が、財貨の生産の増加に比例的なるよりも以上に増加せること」を指すものであつて、Pigou がインフレーションのポピュラーなる定義であるとして掲げてゐるものに相當する。其例は Edgeworth が、良く定義せられてゐるとして引用せる、雑誌 Economist に現はれたるもの及び Stern; Noyelle; 米國聯邦準備局報告に見ることが出来る。(註三) 此第二の定義に於ては、其意味のインフレーションが生じた時には「物價の騰貴」を來すといふことは示さ

- 1) E. W. Kemmerer, "Inflation" (American Economic Review, June 1918, p. 247)
- 2) E. R. A. Seligmann, Currency Inflation and Public Debts. 1921, p. 10.

れてはゐないが、然し此定義を與へてゐる者も、かゝる状態を生じた時には、それがために物價の騰貴を越すものであるといふことを暗黙に認めてゐると解することが出来る。

(註二) Pigou は「インフレーションのホビュラーなる定義は、生産の相伴へる増加に比例的なるよりも以上の貨幣の増加であると主張する」と述べてゐる。¹⁾但し此定義は彼の採用するものではない。

Economist はインフレーションを「財貨の生産の増加よりも急速なる通貨の増加」となし Stern は「金又は財貨の相應する増加の伴はない通貨の増加」と註釋し、Noyelle は「生産物の相應する増加を伴はない貨幣又は支拂手段の増加」となし、米國聯邦準備局報告は「財貨の生産の比例的増加に基かすして通貨を増加せしむる過程」としてゐる。

右の第一の定義と第二の定義とを比較するならば兩者は何れも、インフレーションを以て、通貨の供給増加が或限界以上に達して居つて、其ために物價の騰貴を來すものであるとなす點に於て類似してゐる。然し其「限界」とする處が各々異り、一方は「商業上の必要」となし他方は「財貨の生産の増加」となすのである。此「商業上の必要」及び「財貨の生産の増加」といふ二つの言葉の内容について考ふるに、若し後者の「財貨の生産」が單に有體財の採取、及び製造を意味するものであれば其れがために必要とせらるゝ通貨の量は「商業上又は商取引上」必要とせらるゝ通貨の量に比べて其差が非常に大であることは明かである。蓋し商取引は單に有體財の採取及び製造以外に其等の有體財並に其他の權利の單なる販賣、有價的なる場所的運送及び移轉等の行爲をも包含するからである。「財貨」の原語たる英語の goods は、廣義に用ひられる時は有體財、權利及び勞務迄も包括せられてゐるが、然し Production of goods といはれる時の goods は狹義で、單に有

- 1) A. C. Pigou, The Political Economy of war 1921. p. 93.
- 2) F. Y. Edgeworth, Currency and Finance in Time of War 1917. p. 10.
- 3) S. Stern, The Foreign Exchange Problem, 1921. p. 23. foot-note (30).
- 4) H. Noyelle, Déflation ou Dévaluation (Revue Économique Internationale Vol III. No 3. 1924 p. 424.)
- 5) The Federal Reserve Bulletin, July 1, 1919. p. 614. (cited from Foster & Catchings, Money, 1923. p. 377. note 2.)

體財に限るものと思はれるから、「商業上」必要とせられる通貨の量と「財貨の生産上」必要とせられる通貨の量との間には大なる差があるわけである。

然らば何故に上述の如き定義がインフレーションに與へられるに至つたかといふ動機と其論據とを推測するに、其動機は既述の如く、歐洲戰爭中、交戦國に於て通貨が非常に増加するに至つた原因が、主として、商業上の必要からでもなく、又有體財の生産上の必要からでもないところの、政府(主として消費者たる)の財政上の必要から起つたものであるといふ事實に刺戟せられたからであると思ふ。此點に關しては、Pigou がインフレーションに就ては、前に引用したる彼のいへるポピュラーなる定義の外に「選ばれる一定義は、インフレーションを以て、貨幣及び銀行業に對する政府の妨害の結果たる物價騰貴の部分に關聯せしめる」といつてゐるのに徴しても明かであらう。次に其論據としては、商業上又は生産上の必要に應じて通貨が供給せられるのみであれば、其丈の範圍の通貨の供給のために物價の騰貴が起り得ない、といふ考へを先入的に論者が抱いてゐるのに基くものであると思ふ。其例證としては Patterson が「貨幣又は信用の量の單なる増加はインフレーションではない、蓋し其増加は其需要との關係に於て觀察されねばならぬから。同様に其減少は、若しそれが只商業の量の減少即ち其需要の減少に應ずるものに過ぎないならば、デフレーションと呼ばれるべきではない。(かゝる場合には)物價水準は何等影響を受けず何等の困厄も生じない。」といつてゐる言葉を引用する事が出来る。

さて、以上二つの定義を研究することに依て明かになし得た點は、多くの論者がインフレーション

- 1) A. C. Pigou, op. cit. p. 94. (但し此定義も亦、Pigou の採用するものではない)
- 2) E. M. Patterson, Expansion and Contraction under the Federal Reserve System (The Annals, Jan. 1922 p. 152.) (括弧内は譯者の付加、以下同様)

オンを以て、通貨の供給が或限界以上に達してゐるために物價の騰貴を來すものと定義してゐることであつて、其反面には、若し通貨の供給が其「或限界」即ち商業上の必要或は財貨の生産上の必要以上に達せないならば、其丈の範圍の通貨の供給を以てしては其ために物價の騰貴を來すことがない、従つてかゝる場合にはインフレーションが起つてゐるとは言ひ得ない、といふ考へが含まれてゐる。故に此考へより導き出される當然の結論は、インフレーションを起さしめないためには、通貨の供給を其「或限界」内に止らしむることが必要であつて、通貨の供給が其限界内であるか其れ以上であるかは、インフレーションが発生するや否やの標準となり、更に物價の騰貴といふ事實は、通貨の供給が其「或限界」以上になつてゐるといふことを示す標準になる、といふことに歸着するであらう。

二 右の論據に對する疑問

私は先づ、通貨の供給が、右の「或限界」以上に達してゐないならば、其ために物價の騰貴を來さず物價水準には何等の變化がないといふ論者の說に就て考察する。

今、論者が、財貨の生産の増加に比例的なるよりも以上に通貨の供給が増加せないならば、物價水準に變化を生ぜず物價騰貴が起らぬ、とする理由をたづねるならば、それは、Foster and Catchings のいへるが如く「生産されたる財貨と造出せられたる信用との間には、符節を合するが如き精確なる一致が存在する」といふ假定であり、更に、新なる財貨と新なる信用とは同時に市場

に影響するといふ假定である」¹⁾と言ひ得るであらう。或は又、Pigouのいへるが如く、其考へは「インフレーションは、有形的なる再生産的資本の作出以外の目的のために資金を浮遊せしむることに固有なるものである、といふことを附隨的に意味するものと考へられる。蓋し此考へは、資金が生産的に使用せられた時には、余分の物が此余分の貨幣を埋合はすために造出されるといふに存するが故に」²⁾とも言ひ得るであらう。かゝる考へはCasselの言にも現はれてゐる、即ち彼は「正常なる状態の下に於ては、凡ての新なる購買力は、其新なる購買力の額に相當する價値で市場に提供せられたる商品を通じて生ずる。其故に、一定の期間中の總購買力は購買し得る商品の總量に等しい。購買力の増加は、それに相當する商品の現實の生産の増加を通してのみ生じ得る。今若し一の社會に於て、人爲的 (artificial) 購買力が銀行通貨の形式に於て造出せられたならば、此の虚偽の購買力は必然的に眞正なる購買力と競争するであらう。此の競争の結果は物價の騰貴であらねばならぬ。」³⁾といふ。

然し乍ら、造出せられたる通貨の總量と市場に提供せられたる財貨の總量との間に、かゝる均衡の状態が存するといふことは、全く單なる假定であつて、今日の市場現象の實際に就て見るならば、常に實現してゐることではない。或は寧ろ實現してゐることが例外であると言ひ得るのではなからうか。生産されたる財貨の量と購買に向けらるゝ通貨の量との間に一致が存在せず、前者が後者よりも大であることに依て、物價の急激なる下落を來すことは恐慌の際に屢々起るところであるが、かくの如き場合の物價の下落は、其發現の時に偶々、財貨の量と購買に向けらるゝ

1) W. T. Foster and Catchings, Money 1923 p. 217.

2) A. C. Pigou, op. cit. p. 93. foot-note.

3) G. Cassel, Money and Foreign Exchange after 1914, 1922 p. 19

通貨量との間に不一致が突發したために起つたといふよりも、既に兩者の不一致が其以前より存在して居つて其間隔が次第に大となりつゝあつたものが、或事件によつて暴露せらるゝに至つたために生じたのである、と見らるべき場合の方が多いのではなからうかと考へられる。

此推論の證明は、所謂景氣現象に就ての綿密なる研究に俟たなければならぬものであり、今茲にそれを詳説する余裕を有せないのであるが、市場に提供せられたる財貨の量と購買の爲めに提供せられる通貨の量との不一致の中で、後者が前者に比して多くなるといふ不一致を來す原因の若干を一二の論者の言を借つて述べるならば、「單に財貨が生産されるであらうとの期待にのみ基いて、銀行信用が多額に造出せられる。製造業者は擔保として抵當に入れるべき何等の製品の存在せぬ先に、其信用に依て労働や材料の支拂をなすことが出来る。」¹⁾かくして其銀行信用なる通貨を使用して「工場が建設された時には、家が建てられた時或は更に人々が花火や鐵砲を作る爲に仕事に掛つてゐる時と同じく、明かに何等の余分のものが生産されてゐない。」²⁾然るに造出されたる通貨は勞務又は財貨を提供したる人の手に渡り、それが財貨の購買に向けらるゝ、通貨量の増加を來して、既存の販賣せらるゝ財貨の量に對立するに至るといふ様な場合、或は更に財貨が生産されて消費者の手に渡り既に「財貨の元の分量が消費されてしまつてゐるのに、尙信用が一層多くの財貨を求むる需要として流通を依然として續け得る」³⁾といふ様な場合である。

従つてかゝる場合に於て、市場に提供せられてゐる財貨の量と購買に向けらるゝ通貨の量との間に均衡が存在してゐると共に、物價水準が従前と同じであるといふことは例外であり、寧ろ其

- 1) W. T. Foster and Catchings, op. cit. p. 233.
- 2) A. C. Figou, op. cit. p. 94 foot-note.
- 3) W. T. Foster and Catching, op. cit. p. 234

騰貴の可能性が充分に存在してゐると言ひ得るであらう。然かも是れは通貨が元來、直接消費のために造出せられたことに基いてではなくして、所謂商取引或は財貨生産の必要上造出せられたことに基いて物價の騰貴が生じ得る場合である。於之、物價の騰貴といふ事實があればとて、是より推論して直ちに、其原因は、通貨の造出が商取引或は財貨生産の必要以上に超過したためであるとか或は又 *the price* の云ふが如く人爲的購買力が造出されたためであるといふ様に速断することは出来ない。従つて、若し、通貨が所謂商取引或は財貨生産の必要にのみ基いて造出された場合を以てインフレーションに非すとすれば、次に引用する *Cassel* の主張の如くに、常に物價の騰貴を以てインフレーションの起つた證據となすことと矛盾を生ずる處があることになる。

Cassel は財貨の稀少を生じた場合に生ずる物價の騰貴も、實は通貨の後援がなければ生じ得ないものであるといふことを力説し、財貨の稀少を生じた場合にはそれ丈通貨が減少せなければならぬものであるのに、若しそれ丈の減少をなさないならば、通貨の量が財貨の量に比して相對的に多過ぎることになるから、物價の騰貴を起すものであるといひ、且つ、かゝる場合をも包括せしめる様にインフレーションの意味を擴張して、物價の騰貴が常にインフレーションの起つてゐる標準であるとなすものである。(此主張は前掲書中の「貨物の稀少と其物價騰貴に對する關係」と題する章の中に述べられてゐるが、其結論と見らるべきもののみを次に引用する) (註)

(註) 「若し千九百二十年の終りに於けるが如く貨物の稀少が何等生じてゐないならば、然る時は此物價騰貴は通貨の一層多量なる供給の結果として——換言すればインフレーションの結果として説明せらるべきものである。此假定に基いて、物價

の一般水準はインフレーションの程度の一標準である。若し貨物の稀少が生ずるならば、其時には既述の如く、それに依て物價騰貴が認められる。乍然、此物價の一層の騰貴と雖も、通貨の余りに多量なる供給の結果であると看做される。かくの如くにして、インフレーションの意味が擴張されなければならぬ。然し、此言葉の意味の此擴張は、此事柄の固有の性質の理由に依て、及び又特に其時には一般物價水準によつて現はされてゐるが如き物價の騰貴が凡ての場合にインフレーションの標準となるといふ理由に依て、辯護せられるのである。我々が、インフレーションの原因を決定することに完全に成功したよりも以前に、且又貨物の稀少が物價騰貴に對して如何なる關係を持つてゐるかを見出すことが假令精確には可能でなからうとも、かくの如くインフレーションの意味が與へられてゐるといふことは一の便益である。それ故に、インフレーションの觀念を、限定された意味と更に廣き意味とに於て考へることが自然である。何れの場合に於ても、インフレーションの本質的な點は、余りに多量なる通貨の供給である。前者の場合(限定された意味)に於ては、此通貨の過剰を只だ以前に用ひられたる標準より見積る。後者の場合(更に廣き意味)に於ては、貨物の供給が減少した後¹⁾に於ても尙、以前の標準が維持されてゐることから生ずる通貨の供給過剰をも亦考慮に入れる。²⁾

Seigmann も亦 Cassel と同じ見解を持つてゐる様である。彼は曰く「此需要の増大と相伴つた此供給の減少は、物價水準騰貴の根本的要素にあつた。然し此事は無論、貨幣及び支拂手段の相應する増加を伴はずしては、成立せなかつたのである」²⁾。

三 インフレーションとエキスパンションとの區別

さて前述の如き矛盾を生ずるが故にか、同じく物價騰貴なる事實が存在するとも、インフレーションありとすべき場合と然らざる場合とを分つ論者がある。換言すればインフレーションとエキスパンション(Expansion)とを區別し、更にデフレーション(Deflation)とコントラクション

1) G. Cassel. op. cit, p. p. 61—62

2) E. R. A. Seligmann, op. cit p. 10.

(Contraction) を區別する。例へば Warburg は「生産中の物を代表するところの商業手形 (self-liquidating paper を斯く譯す) に對してのみ準備残高が作出され、通貨が造出されてゐる間は、且又此過程が金との安全なる關係内に保持されてゐる間は、多少鋭き Banking Expansion があり得るかも知れないが、然し是を以てインフレーションと呼ぶべき理由は何等存在しないであらう。……假令、政府の印刷機械が不埒なる仕事をする事を妨げられて居つても猶ほインフレーションが起つたであらうといふことは、屈伸性あり、良く經營されたる現代的銀行制度を享有してゐる何れかの國に於ては、殆んど認めることが出来ない。」¹⁾ といふ。而して Seligmann は「インフレーションとエキスパンションとが良く區別されてゐるとして此の Warburg の言を引用し、且つ、エキスパンションなる言葉に括弧を附して「或は物價の騰貴」と註釋し、更に彼自らも「貨幣及び信用の増加が、生産と消費との状態の轉倒と併進した限りに於ては、物價の騰貴が起つたが、然し何等のインフレーションも存在せなかつた」と述べてゐる。²⁾ (註)

(註) エキスパンションなる言葉は、時としてインフレーションと同意味に用ひられてゐる。又兩者を區別して用ひて居る者の間に於ても、其意味に多少の差異がある。Patterson は、貨幣及び信用の量の増加又は減少が其需要(前取引に基く需要)に超過するものを、各々エキスパンション及びコントラクションと呼ぶを可とし、Davis は通貨の絶對的增加と絶對的減少とを夫々、エキスパンションとコントラクションとなし、インフレーションを(更にデフレーションを)交換されたる財貨及び勞務の絶對量の増加に比例せぬ通貨の増加(デフレーションの場合には其減少)となしてゐる。³⁾ (付言) Davis は、同じくデフレーションといつても、其起源、影響、徑路に於て異なるものがありとしてデフレーションの二三の種類を擧げてゐる。⁴⁾

- 1) P. M. Warburg, Inflation as a World Problem....., (Proceedings of the Academy of Political Science in the city of N. Y. Vol IX June 1920. pp. 118—119)
- 2) E. R. A. Seligmann, op. cit. p. 10 and foot-note.
- 3) E. M. Patterson, op. cit. p. 152.
- 4) Davis, World Currency Expansion p. 8 (cited from, The Annals, Jan. 1922 p. 170)
- 5) Ch. Rist, La déflation en pratique 1924 p.p. 1—10.

従つて是等の論者は、彼等のいふインフレーションなる特別の状態が生じてゐなくても猶、物價騰貴の起り得ることを認むるものである。而してそれは否認することの出来ないものである。故に若し、エキスパンションを以て商取引或は財貨生産上の必要のためにのみ通貨が供給せられて居つて然も猶、物價騰貴を生ずる場合を指すものとすれば、其時の物價騰貴の程度とインフレーションと謂はるゝ場合の物價騰貴の程度とを區別せなければならぬ。此區別をなさずして只漠然と、物價騰貴をインフレーションの起つてゐる標準となすことは甚だ不明確なものとなる。思ふに、通貨の供給が商取引或は財貨生産上の必要のためにのみ行はれた場合にも起るところの物價騰貴の可能程度は、通貨の供給が右の必要以上に行はれた場合に起るところの物價騰貴の可能程度よりも小であるといふ事は、大體言ひ得るかも知れないが、それ丈では、インフレーションと謂はるゝ場合の物價騰貴に對する對策を立つる上に甚だ不充分である。従つて少くとも、通貨の供給が商取引或は財貨生産上の必要のためにのみ行はれた場合に生ずる物價騰貴の可能的限界が明かにならねばならぬ。是は甚だ困難なる事であるが、是が明にならねばインフレーションと謂はるゝ場合の物價騰貴を何處迄抑制するかといふ事に就ての目標が立ち難いと思ふ。

以上、私は、單に物價の騰貴といふことのみでは、論者のいへるインフレーションの場合と然らざる場合とを分つに就ての明確なる標準となり得ないことを述べ、インフレーションと謂はるゝ場合とエキスパンションと謂はるゝ場合との物價騰貴の程度を各々區別する必要があることを説いたのである。而して其れは、物價騰貴の程度如何のみを標準としてインフレーションと然ら

ざる場合とを區別するものであり、且つ其物價騰貴の程度如何が通貨の供給量が或限界以上に多過ぎるか否かの標準とせられるのである。然し乍ら、一定時に於ける通貨の供給量が多過ぎるか否かを知る標準は、物價騰貴の程度如何以外には存在せぬか否かは尙考察を要するであらう。

四 通貨の供給量が正常なりや否やを知る方法に就て

一定の時に於ける通貨の供給量が正常なりや否やを知ることは、體温の正常か否かを驗温器によつて知るが如く容易ではなく、寧ろ甚だ困難である。其困難である一の理由は、一定の社會に於て正常と見らるべき通貨量は常に定數たることを許さぬといふことであると思ふ。従つて正常と見らるべき通貨量は變數である、其變數たるは經濟現象が靜止的でないことに依て明白である。今、かゝる變數たるべき通貨量が平常なりや否やを知る合理的標準を求むるならば、次の如きものが抽象的に考へ得られるであらう。

其(一)は通貨量の増減と密接なる關係を有し、而も通貨量の増減のみを其原因として發生する或事實の變化程度を標準とすることである。其(二)は通貨量の増減と密接なる關係を有し、而も通貨量の増減のみを其結果として發生せしむる或事實の變化程度を標準とすることである。而して(一)の方法に於て必要な條件は、標準とせらるゝ或事實そのものが、通貨量増減の原因となる場合があつてはならぬことであり、(二)の方法に於て必要な條件は、標準とせらるゝ或事實そのものが、通貨量増減の結果となる場合があつてはならないことである。

以上二つの方法は、一定時に於て現實に造出せられたる通貨量が正常なりや否やといふことを、通貨量の供給のみを、其結果として或は其原因として發生する或事實を其儘標準とするのであるから、それに就ては豫め、其標準とせられたる其の或事實が如何なる状態を呈したる時を、正常とし妥當とするかの價值判断が確立せることを要するであらう。然し、尙、別の方法としては、始めより價值判断に依て、通貨を當然必要とする一般に認めらるべき或事實を定めて、其事實の變化程度を標準とすることに依て、一定時に於ける通貨量が正常なりや否やを見ることも考へ得らるゝであらう。而して此方法に於ても、必要な條件は、其標準とせらるゝ或事實が、通貨量増減の結果として發生する場合があつてはならぬことである。

以上三種の方法の中何れの方法を探るにしても、私が必要條件としたるものを充すに足るべき、標準とすべき事實を求むることは恐らく不可能の如くに思はれる。經濟現象中に於て通貨量増減の原因のみとなり或は結果のみとなるが如き事實は存在せない様である。物價、金利、所得財貨の生産、商取引、人口、富、……と並べて見ても、何れも直接間接に、通貨量増減の原因ともなり結果ともなるものである。かくの如くにして右の必要條件を充すに足るものが存在しないとすれば、此條件を撤去して、原因又は結果の何れとなるかに關せず、(A) 通貨量の増減のみと平行的又は隨伴的に發生する事實、或は、(B) 價值判断に依て通貨量の増減が、それと平行的又は隨伴的に發生することが當然必要であるとして一般に認めらるべき事實、か何れかを標準とすれば如何であらう、と考へ得られる。而して(A)の方法に於ては、矢張り、其標準とせられたる或事實が、

如何なる状態を呈したる時を正常とし妥當とするかの價值判斷を要するであらう。

さて、先に述べたる、多くの論者が掲げてゐるインフレーションの定義の中に現はれゐるインフレーション起否の標準となすものを見るに、右(A)、(B)何れかに該當する事實を標準としてゐることが判る。即ち、(C)の如く、通貨量の増加がなければ物價の騰貴が起り得ないとの理由によつて、物價の騰貴をインフレーションの起つてゐる標準となすのは、「物價の騰落」を以て(A)に該當する事實となすものであるといひ得る。従つて此場合には物價が如何なる状態を呈したる時を正常とするかの價值判斷を當然要する事になる。次に、財貨の生産、或は商取引の必要以上に通貨量が増加するものをインフレーションとなすものは、「財貨の生産、」或は「商取引の必要」を(B)に該當する事實となすものであるといひ得る。又 Nicholson がいへる「富、商業、人口等の増大に應ずる通貨の増加は正常と認められる。インフレーションは異常の増加を意味する」¹⁾この言句の中の、富、商業、人口といふものも亦、(B)に該當する事實であらう。従つて是等の(B)に該當する標準に就ては、既に一定の價值判斷が與へられて居つて、通貨量の増加が、是等の標準たる事實の増大に應ずることのみが一般に望ましく、それを正常とするといふ思想が含まれてゐるわけである。従つて既に價值判斷に依て左様にするのが正常であると肯定するとすれば、其標準とする事實の増減に應じて通貨量を増減せしむれば足るであらう。然し其價值判斷が果して妥當か否かといふことは尙、殘し得べき問題である。反之、物價の騰落を以て(A)に該當するもの即ち通貨量の増減のみと平行的又は隨伴的に發生する事實となすことは、其事自體が一の問題とな

1) J. S. Nicholson, War Finance 1917 p. 62.

つて所謂貨幣數量説に關聯する論議を惹起し得ると共に、更に正常とすべき物價水準とは如何なるものであるかの問題、並に、かくして選ばれたる或物價水準が何故に正常であるかの理由を説明すべき仕事が残ることとなる。

五 物價の騰落は通貨量の増減を伴はずして

は發生し得ざるか。

今、右の問題の第二のもの即ち物價の騰落が通貨量の増減のみと平行的又は隨伴的に發生する事實であるか否かに就て考察する。それに就ては豫め通貨の意義、範圍を明にして置く必要がある。

上述したところに於て種々なる論者が用ひてゐる通貨 (Currency) 其他是を類する言葉は其意義、範圍が必しも一定してゐないと思はれるが、其儘引用して來たのである。此 Currency の意義、範圍に就ては英國に於ても曾つて論争があり今日に於ても尙、人に依て其解釋に廣狹があるが、大別すれば、一般的授受性又は交換性を有するものに限つてカレンシーとなすものと、更に廣く解釋するものとに分つことが出來ると思ふが、今之等の解釋の相違に就て述べることは省略し(註)、私が以下に於て、自ら、通貨の語を用ひる場合に於ては、是を廣く解釋し、苟も一定の社會に於て支拂要具として用ひらるゝことを主要職分とし共通の一定單位を以て表明せられてゐる手段方便ならば、其材料及び形式の如何を問はず、是を通貨となすものである。

1) H. D. Macleod, The Theory of Credit 2 ed. 1897 p.p. 854—864.

(註) 一般的授受性又は交換性を有するものに限るもの間に於ても、其一般的授受性ありとするところのものは一定してある。其例は Kinley; Johnson; Withers; Mepherston。更に廣く解するものは Macleod; Fischer。

さて「物價の騰落が通貨量の増減のみと平行的又は隨伴的に發生する」といふ言葉の意味は、其騰落と増減との先後が何れの側にあるを問はず、物價の騰落なるものは通貨量の増減を伴はずしては發生し得ないものであるといふこと、並に通貨量の増減を伴はない原因によつては物價は騰落し得ないといふことを意味する。此考へは既に一言したるが如く、Cassel のいふところである。然し私は、絶對無條件に此主張が成立するか否かを疑ふ。

彼は「物價の騰貴は、財貨の鋭き需要——此鋭き需要が大戦中に(存在したことは)勿論感せしめたが——に基くものであるといふ、多く用ひられたる議論は誤れるものである。財貨の需要は、若しそれが經濟的意義を持つべきものならば、支拂能力に依て支持せられてゐなければならぬ」といつて其論旨を進めてゐる。勿論、財貨に對する需要なるものが經濟的意義を持つためには、支拂能力換言すれば通貨の後援がなければならぬ、即ち其需要は有效的需要 (effective demand) でなければならぬ。従つて個々の物の價格(此價格は單に其呼値でなくして賣買せられたる價格であるとして) が從來よりも騰貴したといふことは、其物の一定分量に對して通貨が從來よりも多く支拂はれたことを意味する、例へば從來三圓で買ひ得たと同一の机を今日五圓で買つたならば、二圓半從來よりも多くの通貨を支拂つたのである。乍然、假りに以前には十億圓の通貨を以て、一種の品物に千万圓宛の割合で百種の品物の或分量が買はれたとし、其時を基準として其百種の

- 1) D. Kinley, Money (The Citizen's Library) 1923. p. 40; J. F. Johnson, Money and Currency 1907 p. 8; H. Withers, The Business of Finance 1918 p. 35; L. G. Mepherston, The Flow of Value, 1919 p. 43.
- 2) H. D. Macleod, op. cit. p. p. 164—165; I. Fischer, The Purchasing Power of Money 1918 p. 10.
- 3) G. Cassel, op. cit. p. 55

品物の其時の賣買價格を(其賣買價格は一種の品物に就て凡て均一として)各々一〇〇で現はし、其れを單純に算術平均したる物價水準が一〇〇であるとする。次に其後に於て、同じ十億圓の通貨を以て、同じ百種の品物が購置せられたが、其割合が以前の如く一種の品物に就て千万圓宛ではなくして、或品物には二千万圓、三千万圓、又或品物には五百万圓、七百万圓といふ様に種々異つた割合で買はれたとするならば、其時の百種の品物の賣買價格の各個別指數が以前の基準一〇〇に對して或は多くなり或は少くなるが、それを先の如く單純に算術平均した結果が同じく一〇〇となるであらうか。是れが元の如くに一〇〇となるためには、從來千万圓宛支拂はれて一〇〇であつたものが、二千万圓支拂はれて二〇〇となり、三千万圓支拂はれて三〇〇となり、五百万圓支拂はれて五〇〇となるといふ風に、其品物の購置に向けられる通貨の分量と正比例的に個々の品物の價格が變ずることを要するであらう。然し實際に於て果してそいふ様になるであらうか。私は寧ろ次の如くなるのではなからうかと思ふ。例へば、米に對して從來一億圓支拂はれたものが、人口が増加して米の需要が増加して一億五千万圓支拂はれることに成つたとする。若し此場合に其社會全體の通貨が以前と同様に十億圓であるとすれば、米に向けられた五千万圓の増加丈は、何か他の品物の購置を差控ゆることに依て生み出されねばならぬ、假りにダイヤモンドから千萬圓、自動車から四千萬圓取られたとすれば、米、ダイヤモンド、自動車のそれらの價格はどうなるか。米の價格は、需要が五割増加したが米産額は急に増加しないから、一〇〇から二〇〇にも上るかも知れぬ。ダイヤモンドは需要が一割減少したが(從來一億圓支拂はれた

として、以下同様)奢侈品であるから一〇〇より七〇と三割も價格が下落するであらう。更に自動車は四割の需要減少を來したが其價格は一〇〇より下つて六〇位に止つてゐるかも知れぬ。今、此の三つの品物丈の算術平均をとれば、前の合計三〇〇平均一〇〇より今は合計三三〇平均一〇〇となる。

斯くの如くにして、凡ての品物の購買に向けらるゝ通貨の全量は従前と同じであつても、各種の品物各々の購買に向けらるゝ通貨の分量が従前と同じでないために、物價水準が以前と同一でないことが起り得ると思ふ。勿論其結果は常に物價水準の騰貴ばかりではなく、其下落も起り得るであらうが、兎に角、通貨全量が従来よりも増加せずともかゝる個別價格の變化——其變化は或は個々の品物の供給量の増減或は其需要の増減或は此兩者の組合せの起ること等に基く——を通じて、物價水準の騰貴が起り得ることが可能であるから、*Case* のいふ如く、物價が騰貴するためには常に必ず通貨の増加がなければならぬといふことは絶對的には主張し得ないと思ふのである。又、従つて、物價の騰落が通貨量の増減のみと平行的又は隨伴的に發生する事實であるとは、絶對的に主張し得ないこととなる。故に物價の騰落を以て其時の通貨量が正常なりや否やを知る標準となすことは精確な方法ではないことになる。只、通貨の全量が増加(又は減少)せずしては、物價水準が長い間繼續的に絶えず騰貴(又は下落)の一路をのみ辿るといふことは起り得ないといふことだけは言ひ得るであらう。但し其騰貴又は下落一方の繼續期間が如何程であつたら、通貨の増加又は減少が生じたことの證據となし得るや否やは不明である。是が明瞭になるた

めには、先に述べたる如き、通貨量の増加又は減少なくして生じ得る物價水準騰落の可能的限界が示されねばならぬ。

尙、茲に付言すべきことは、(B)の方法即ち通貨量の増減が平行的に伴ふことが當然必要であると認められる事實を、價値判断に依て一定して、之を標準とすることが正常であるとする場合に於ても、何故にそれを正常とするかといふ理由が、それを標準とすることに依て、物價水準に何等の變化を生じないといふのであれば、是亦今しがた述べたるところに依て絶對的には維持し難いことになる。従つて Nicholson が「如何なる形式の通貨でも其過剰又は過多に於て常用せられるプラクティカル・テストは其減價である」となし、更に通貨の減價には一般的減價と特殊的減價とがあるが、インフレーションに就て問題となるのは寧ろ一般的減價であるとし、而して此一般的減價(或は昔の論者が唱へたる全通貨(the whole currency)の價値の變化)の程度は、常用せられる物價指數(Economist; Sauerbec 等の)にて荒まし測定せられる」と述べ、且同時に前掲の如く、「富、商業、人口等の増大に應ずる通貨の増加が正常と認められる。インフレーションは異常の増加を意味する」といつてゐるが、若し此言の中に、富、商業、人口等の増大に應じて通貨の増加を行へば、常に物價水準の騰貴が生じ得ないといふ意味を含んでゐるならば、既述の理由に依て、かゝる意味の擴張は無條件には許し難いことになるであらう。

結 論

以上、私は多くの論者が與へてゐるインフレーションの意義又は定義に就て、其意味及び論據

1) J. S. Nicholson, op. cit. p. 62.

とする思想を推究して批評を試みたのであるが、多くの論者がインフレーション起否の標準としてゐる物價水準の騰落なる事實は、上述の如く、論者の與へてゐるインフレーション存否の標準としては甚だ不明確なるを免れない。エキスパンションと謂はるゝ場合にも物價騰貴は起り得るし、通貨量が商取引又は財貨生産上の必要にのみ基いて供給せられた場合にも其騰貴は可能である。勿論、物價水準の状態に依てインフレーションと然らざる場合とを分つことが出来れば甚だ簡明なる標準であつて、茲に長所が存在するが、目下の調査及び研究では其區別が出来てゐない。且又、物價水準の騰落を以つてインフレーションか否かを區別する標準とすることは、既に生じた結果に依て判断を試み對策を立てることになるから、豫めインフレーションの起ることを防止する上に多少遲きに過ぎる憾みがある。反之、豫め價值判断に依て、平行的に通貨量の増減する事が望ましいとする事實を標準とすることは、一旦生じた結果より溯つて對策を立てるよりも優れてゐるか、其標準とする事實を何に求めるか、且つ其事實を二つ以上採るならば其配合を如何に定めるか、難しい問題となる。

是等の欠點或は困難の存するが故にか、一二の論者の如きはインフレーションを定義する事は難しいといつてゐるが、然し今後、個別價格及び一般物價の騰落に關する調査及研究が進み、又、一方に於て、近時英米に於て試みられてゐる所謂 Business Barometer の如き研究が完全になるに従つて、是等の欠點困難が次第に除去せられる可能性が存するであらう。私は其日の來ることの早からんことを望むものである。(完)